

博多湾生態系活性化プロジェクト

井上武弘（福岡市 東区役所）

博多湾は閉鎖性の湾でございまして、東西に長く20キロぐらいあります。この中で今回、活動の場所は一番湾奥にあります和白干潟というところ。ここは80ヘクタールくらいの砂質の前浜干潟です。こちらは渡り鳥の飛来地として国際的にも注目されています。ちょうど朝鮮半島からの渡りのルートと東南アジアからの渡りのルートのクロスロードにあたり、カモ類とか、シギ・チドリ類とか、あと最近では世界に約1,800羽とか言われていますけれども、クロツラヘラサギという希少種が飛来するので有名なところ。ここはもともと江戸時代には、白砂青松の海岸でして、それが博多のまちの発展とともに、人々の環境負荷により干潟化してきたという場所です。特にここ数十年のレベルで干潟化してきたという歴史がありまして、そういう渡り鳥が来るようになったのも、干潟化に影響を受けているわけで、常に状況が変化している干潟です。

この和白干潟でのプロジェクトも当初の目的とやり方とは、現在までどんどん変化しております。実は、博多湾の中でアイランドシティという400ヘクタールほどの埋立事業が現在進行中でございます。そういう中で、この干潟の保全というのは、市としても基本計画の中にも位置づけていますし、この事業の進展の途中で、綿密なモニタリングをしながらやっていたわけです。けれども、常に自然保護団体からは厳しいご意見をいただいていたかなり激しいやりとりというのもあったわけです。

この和白干潟でのプロジェクトも当初の目的とやり方とは、現在までどんどん変化しております。実は、博多湾の中でアイランドシティという400ヘクタールほどの埋立事業が現在進行中でございます。そういう中で、この干潟の保全というのは、市としても基本計画の中にも位置づけていますし、この事業の進展の途中で、綿密なモニタリングをしながらやっていたわけです。けれども、常に自然保護団体からは厳しいご意見をいただいていたかなり激しいやりとりというのもあったわけです。

そういう中で、私たちも1年中干潟のほうに出ていって、ここの干潟が現状でも生物の生息場としては非常にいいところであると認識していましたが、夏場のアオサの発生が問題でした。アオサが一面に敷き詰められると、干潟への酸素の供給というのが全く遮断されたような状態になりまして、ちょっとめくると真っ黒のいわゆる還元層というのが見られます。それとそういう状態になると、生物活動も衰えますので、干潟がすぐかたく締まってしまいます。こういう状況がありまして、これを何とかできないかなと考えました。

何か自分たちの力でやれないかという仲間たちが10人ほど集まりまして、市の職員研修所の自主研究に対する助成制度（年間3万円）を使い、海底耕耘をしてみようと、10人で10メートル四方を2箇所やったわけです。

道具なんかありませんから、みんな1人ずつスコップを持ってくるわけです。ちょうど海岸から沖合100mくらいのところですけども、干潟でスコップを担いで掘っていると、これは市民団体の方も見られており、当然、何をやっているんですかという話になってきます。わけを話しながらやっておりますと、じゃ、私も手伝うよと。今までテーブルの上ではかなり厳しいやりとりをやっていた市民団体の方々が自然に集まってこられるようになりまして、一緒にやりましょうということになって、何回かやりました。

それで大きな耕耘機とありますが、みんなのやる気が起

こったというのは、実は平成15年8月に福岡県水産海洋技術センターから、何か耕したようなでこぼしたところからクルマエビが見つかったという話があったときでした。実は、ここでクルマエビが見つかったのは、少なくとも10年ぶりくらいで、まさに耕したところだけクルマエビが見つかったということでした。これで一気に勢いがつき、聞きつけた方が参加されるようになりました。

我々は全然宣伝していなくて、今、3年目なんですけど、延べ参加人数で100人程度いらっしゃるようになってきました。

現在、主な活動として、活動方針を決める研究会と、干潟を耕すほか、結果を見るために、生物をみんなで分類したりしています。活動の中に地元にお住まいの大学教授OBの方、コンサルの方とか、詳しい方がいらっしゃるので、そのたびごとに即席の観察会なり解説があったりして、そのうちにみんなで、なべを囲んだり、今日はアサリをとって食べましょうとか、そういういろいろなオプションが付きまして、現在に至っています。

これがきっかけとなりまして、平成16年度から、福岡市のアイデア予算に応募しました。それである程度の予算がとれましたので、手押しの耕耘機で耕耘実験したり、物置を設置したりするほか、耕耘効果の検討などを行っています。

市民団体の方から、協議会みたいなのを立ち上げたいというお話もありまして、今後そういう発展の仕方をしていくのかなと思っております。我々もそれを支援しようと思っております。

以前は、犬のふんの放置やごみの不法投棄が結構多かったんですけども、そういうのがめっきり少なくなったということです。あとは、市民団体の方と青空のもとで話すと、非常に打ち解けた雰囲気です。いろいろな話が出てきて、情報の共有化ができるということです。こちらの港湾の事業への要望とか、協力についても非常にスムーズに進むようになってきたので、我ながら、実はびっくりしているところです。

【ポイント】 実は耕すときに、掘り方を工夫して、山をつくっています。まず縦にラインをつくり、今度は同じようなことをしてクロスさせます。そしたら、山がいっぱいできるわけです。アオサが大量なときも山の上は覆われることなく、酸素が供給されるというもくろみもあって、そういうやり方をやっています。

【ポイント】 手押しの耕耘機でもやっているんですけど、今も実は手で掘っています。やっぱり何か汗を流さないと気持ちがいじり上がらない。最初に手掘りを行ったところは歴史的に残そうということで同じところを掘っています。自分の手でやらないとわからないことも沢山あるので、私たち職員についても干潟を知るうえでは非常に重要な活動になっています。

博多湾生態系活性化プロジェクト

Hakata Bay Ecosystem Vitalization Project

博多湾生態系活性化プロジェクト

このプロジェクトは、福岡市職員賛同者と各分野の専門家の方々や市民団体の方々、また、その他の賛同される方々が共働で、福岡市の和白干潟における干潟耕作など、博多湾の生態系の活性化に取り組む試みです。



和白干潟(牧の鼻から望む)



和白干潟の位置



情報交換を行う勉強会



干潟耕作実験



干潟耕作中



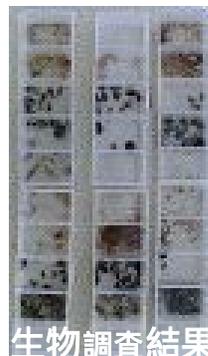
干潟耕作実験その後



生物調査の様子



フィールド調査で見つかった
クルマエビ



生物調査結果

活動の目指すもの

このプロジェクトは、博多湾が、さらに多様で豊かな生き物の生息の場となるように、人の適切な働きかけにより、自然本来の機能を充実させ、湾の生態系が自ら活性化していくような仕組みを創り上げていくことを目標にしています。現在は、シギ・チドリ類など渡り鳥の国際的に重要な飛来地である和白干潟において、福岡市職員、学識経験者、市民団体、市民が協働して、シギ・チドリ類の餌となるゴカイ類の増加を図るため「干潟耕作」などを試んでいます。

活動場所について

和白干潟(福岡県福岡市東区和白4丁目地先)

活動期間、頻度について

2003年5月にプロジェクトを立ち上げ、現在に至っています。主な活動としては、和白干潟でのフィールド実験と、活動方針の検討・決定や情報交換などを行う勉強会を毎月1回実施しています。その他、ホームページで和白干潟の状況のお知らせや調査結果の報告などの情報交換も行っています。

関係者について

はじめは福岡市職員有志の10名に満たない集まりでしたが、次第に口コミで参加希望者が増え、学識経験者や市民団体、市民などを加え、延べ参加者が100名を超えるまでになっています。



耕耘機実験



博多湾生態系活性化プロジェクト(福岡市港湾局環境対策部環境対策課)

(連絡先) 〒812-8620 福岡市博多区沖浜町12-1(博多港センタービル3階) TEL 092-282-7132 FAX 092-282-7772
(インターネット) <http://homepage1.nifty.com/hanedo/>

Hakata Bay Ecosystem Vitalization Project (c/o Residential Env. Div., Fukuoka City Office)

(Contact point) 12-1, Okihama-cho, Hakata-ku, Fukuoka, 812-8620, Japan Phone +81-92-282-7132 Facsimile +81-92-282-7772
(Web page) <http://homepage1.nifty.com/hanedo/>